

第3章

信仰覚醒運動内の先駆者、児童救護活動

1

ディアコニーと19世紀の内国伝道の母体としての
信仰覚醒運動 - ドイツ・キリスト教協会 - J. A. ウルルシュペルガー
シュタインコップとヨーロッパ聖書協会の創立

信仰覚醒運動はディアコニーと19世紀における内国伝道の母体を形成した。その前史は18世紀の最後の3分の1に及ぶ。理性的なキリスト教は、啓蒙主義の満ち潮のただなかで、農民の中で、とりわけ北ドイツにおいても、正統信仰の島のままであった。新しい出発にとって決定的なことは、主にヴェルテンベルグに、またニーダーランドに残っていた無数の敬虔主義者の小さなグループがいたことである。この後期敬虔主義のグループは、18世紀の終わりにむかって、地方に広がる緊密なネットワークをつくった。この「この地の穏やかな人たち」[Stillen im Lande]の下で、主にヨーハン・アルブレヒト・ベンゲルス(1687-1752)によって深遠な聖書主義が語られ、聖書に親しむ質実なキリスト教が愛された。[1]

これらの聖書主義、敬虔主義グループの多くが、アウクスブルクのルター教会の長老、D. ヨーハン・アウグスト・ウルルシュペルガー(1728-1806)が1780年に創設しバーゼルに居を構えたドイツ・キリスト教協会に集まっていた。ここで、これらの聖書信仰の人たちの結集がおこり、敬虔主義が進めていたすべては驚くほど活発なものとなった。アウグスト・ヘルマン・フランケがすでに育てていた、信仰に覚醒した仲間たちとの関係は、イギリスで容易につくられた。[2]

実際に、実践的キリスト教が19世紀に初めて完全な開花を経験したのは、とりわけアレマン人の地域である。何世紀も暮らしているスイス人の豊かさ、アレマン人の冷静な能力と、シュヴァーベン人のキ

リスト教を教える才能をもった人たちは、バーゼルに集まり、神の国の奉仕を世界的に有効なものにしていった。[3]

この信仰覚醒運動から、最初に聖書協会とトラクト頒布協会が生まれた。1804年、英国聖書協会と外国聖書協会がロンドンに創立された。同じ年にバスラー聖書協会が設立された。[3*] 英国聖書協会の外国人書記は、活動的なシュヴァーベン人、カール・フリードリヒ・アドルフ・シュタインコップ(1773-1859)であり、バスラーのキリスト教協会の元書記、その人であった。彼はこのロンドン聖書協会のために西ヨーロッパ全域を旅して回り、いたる所に支部を作った。1812年にヴュルテンブルクの聖書協会がシュトゥットガルトに、1814年にプロイセン中央聖書協会がベルリンに生まれた。19世紀の20年、30年の間に全ドイツは聖書協会のネットで結ばれた。力を弱めた理性主義の「民族聖書」は成功していたが、再び排除されるようになった。この活動によって、ドイツのキリスト教は、教会固有の領域を越えていく展望が広がった。

2

聖書の現実主義 - オベリン、幼稚園の父
「キリスト教産業」 - Ph.M. ハーン - G.A. ヴェルナー

南ドイツの地方には、一風変わった信仰の世界がある。「18世紀末に、世界はほとんど耐えられない力に満たされて、突然激しくあらわれるという終末待望」の信仰に覚醒したキリスト教徒たちが、あらわれた。[4] すべての出来事は、近づくキリストの再臨の時に、いわば審きの柱として仕えているそれ以外のものではなかった。また再臨待望がまだかなえられていない時でも同じように、人の子のからだと魂とこの世の全財産を取り上げるために、神の国が見ることの出来ない世界から突然あらわれるという衝撃的な期待にとどまっているのではない。この世は、まだ変わっていないすべてが変えられるために、彼[キリスト]が再び来られるまで、そのなかでキリストが働いている神

の国の活動の現場であり、そこから新しいキリスト教の愛の意志が生まれる聖書の現実主義の中核を構成している。この分ちがたいキリストとの連帯性の確信の上につくられた世界に広がっていく新しいものは、実践的であり、3つの衝撃的な見解となる - 創設された救護施設を通して教育制度を改革する中で、農業の中で、そして「キリスト教産業」の試みの中で - 影響を与えた。[5]

ヨーハン・フリードリヒ・オベリン牧師(1740-1826)はアルザスでシュタインタール[石の谷]を花咲く谷に変え、この地を発展させた。彼は謙虚と忍耐をもって、国の中で最も貧しく最も荒れた彼の共同体を一生かけて真実なものとし、またここで幼稚園の父、組合活動の父、また伝道者、不屈の福音宣教師となった。[6]

彼はキリスト教産業の思想をほかの工場でも実現するために、後にル・グランが受け継いだ綿紡績工場の導入を指導した。[7]

オベリンは学校の校舎を建て、農民たちといっしょに街路と橋を整備し、農園を向上させ、貸付金庫を設立し、後の経済的、社会的発展を大胆に先取りする、才能豊かな教育者であることを証明した。そうして来世の学問に駆られていた時、彼の最愛の妻を早く亡くしたその後1年間は、ほとんど毎日夢を見ているか、目を覚ましているかのような彼女との霊的な結婚生活を送った。それは彼だけでなく、シュタインタールの多くの他の人たちにもそう思われて、災いに注意するように、またなにが起ころうとしているかを語った。

オベリンは異邦人宣教師の暖かい友であり、1795年には、すでに聖書を学ぶ学生であり、彼はフランスの福音主義またカトリックのグループの中で、聖書頒布と福音伝道を大きな犠牲のもとで進めた。彼の誠実な下女[Magd] ルイス・シェップラー、民族出身の質素で信仰深いこの女性は48年間無報酬で、死ぬまで優れた女教師として、幼稚園で、その共同体出身の誠実な仲間たちと一緒に、彼に仕えた。

1760年新年元旦に、20歳のオベリンは、日記に次のように書いている。

「聖なる神！私は、私と私が持っているものすべてをあなたに献げます。私の魂の力、私のからだの肢体、私にできること、私の時間を。主

よ、用いてください。あなたに奉仕するように定められた道具として！・・・私が最後の、死の瞬間にも、あなたに仕えているものとしてください。」[8]

「キリスト教産業」を設立する試みの中で、とりわけフィリップ・マテウス・ハーン(1739-1790)とグスタフ・アルベルト・ヴェルナー(1809-1887)、2人はスイス人牧師であり、われわれの前に突出している。フィリップ・マテウス・ハーンは「機械をつくる才能」において、彼の同国人の中に眠っている科学技術の才能を呼び覚ましたスイス人の父祖たちのなかで意義深い人である。同時に、彼は信仰の覚醒を求める、すぐれた説教者であり、文筆家であり、牧者である。愛の人は貧しいスイスの高原で、ヨーロッパの人たちが耳を傾けた、とぎれることのない発明品の連続によって、繁栄するスイスの機械の輸出産業を可能にした。彼はすばらしいプラネタリウムを製作し、科学技術のより完全な計量器の発明家であることを証明し、精密な計量器の考案者、日時計の専門家、砲兵の専門家、そして測地学の器械の専門家であることを証明した。

科学技術・手工業の援助者また仲間と一緒に、彼はキリスト教の組合経営理念をもつ作業場を経営した。[9]

キリスト教産業の思想は、南部の全域で、スイス人副牧師、グスタフ・アルベルト・ヴェルナーによって守備一貫して試みられた。彼は、技術的生産手段を抑制なく使う、魂を失くした社会を破壊する悪魔が、自分の工場の中にいないか探した。彼のロイトリングの機械工場、彼の金属鑄造、デッティンゲンの大きな製紙工場、家具工場、よく知られた徒弟の作業場を、彼は未婚の従業員の家族的な共同体の中で、福音伝道の手助けをもって共同生活をするように導いた。純益で非行化する子ども達を就職させ、彼の愛弟子と病人と困窮者の援助に、資金を使った。

ヴェルナーもまた情熱的な神の国待望に満たされていた。彼は、「ヨハネの愛のキリスト教」の出現と、教会と民族の生活の再生と、近いうちにキリストの王国のために人を獲得することを、期待した。この世は、彼にとって、キリストが再び来られる時まで働くキリストの活

動の場である。彼の大胆な「キリスト教産業」建設の試みは部分的には達成した。ヴェルナーは自分が建てた病院で永眠した。[10]

偉大な子どもの友ヴェルナーは製紙工場をはじめるとあたり次のような詩を書いている。

「ロールと元気なターピンは工場に命を吹き込む。活発な機械と、大小の車輪が！ 貧しい人に彼の料理を、裸の人に着るものをつくりだす、私たちの仲間の中に愛と義が支配しますように。」 [11]

3

南ドイツの救護施設運動 - ボイゲンの独房 貧民学校教師の施設 - キリスト教教育

非行少年の救護施設の創設は将来に影響を与えた。貧民救護は、市民社会の本来の事案となった。宗教改革者達の最初の意図とは違って、ルター主義は教会をすべての外面的な世界の事柄に対して消極的態度に導いた。啓蒙主義はこの状態を変えようとはしなかった。非常な困窮の中で、公共の福祉が明らかに低下すると、貧窮は際限のないものとなった。その時、助けることができる人もまた助けようとする人もまったくいなかった。ナポレオン戦争の苦難の中で、信仰覚醒した仲間から、キリスト教集会から、青年男女が頭角をあらわした。彼らは、ここで外面的な困窮と道徳的な荒廃とが互いに結びあっているような、下の階層に始まった社会的困窮を確かな展望を持って認識した。[12]

クリスティアン・フリードリヒ・シュピットラー(1782-1867)とクリスティアン・ハインリヒ・ツェラー(1779-1860)は、アレマン人の中に非行少年たちのための最初の救護施設となる基礎に結集した。それは孤児となった非行少年たちを助け、ヨーロッパにおけるナポレオン戦争の恐ろしい遺産とその荒廃した後遺症を取り除くにふさわしいものであった。ここで、ついに内国伝道の創設を導いた慈善活動の道が始まった。

シュピットラーは大企業家になる素質を持っていた。彼は限りない

粘り強さをもってパーゼルから、バスラーミッションの創設(1815)、フォン St. クリスコナ(1840)、リーエンにおけるディアコニー施設(1852)、ほかの事業を導く、神の国の計画を実行した。キリスト教事業の偉大な創設者とその組織家は、ツェラーが救護施設をつくることのできる比類のない人であることを認めた。法律家であり早くから教師としての真の召命を見出したツェラーはシュピットラーと共に、1820年のこの計画を、もっとも荒廃した、以前はドイツ騎士団のもので、結局伝染病の野戦病院に使われていたバーデンにあるシュロス・ツー・ボイゲンの中で行った。2人とも信徒である彼とシュピットラーは、そこで貧困児童を助け「貧民学校教師」を養成する施設の基礎づくりを可能にする会をパーゼルにつくった。[13]

ツェラーは当時別のところでもはじめられ、広まっていた救護施設を、キリスト教教育へと育てた偉大な先駆者アウグスト・ヘルマン・フランケがしたように、ペスタロッツィの経験と知恵とを教育に結びつけた。ヴィヘルンはツェラーから決定的に学んだ。ここで、この基礎の上に、19世紀に大変長い間自由主義の教師とならんで力を発揮したキリスト教学校教師のタイプが教育施設の実践的な活動の中で養成された。[14]

ツェラーはこの仕事を、1820年に10人の貧民学校教師候補者と20人の少年と10人の少女と一緒にはじめ、40年間続けた。寄付のための物乞いはせず、まったく自由な寄付によって生計を立て、彼は子どもの多い家族と施設に住む生徒たちを、友人の自由な寄付によって豊かにした。というのは、すべての施設は、全能の神が望んでいる限りのことであって、長く存在するべきではないし、可能であってもならないからである。ツェラーは75人の子どもを同時にみるようなことは制限するつもりでいた。家族原理は彼によって救護施設の根本原理とされた。彼は施設を小さく保つことによって、閉鎖的な教育社会の特徴と家庭生活のそれを調和的に結びつけようとした。敬神の念と実践的な才能は、彼においては表裏一体であった。

子ども達は、主に家と畑で忙しく働いた。産業は、子どもとその両親が身をもちくずした不幸に責任があった。子どもの中から、農業労

働者と手工業者を探し、日々の生活必需品は家内産業の中で、できるだけ家で生産した。だが、施設はそれによって存続していたのではなく、後援者たちの寄付金によっていた。福祉教育をまかせた若者は、まず、彼らがかつて入り込んで、日々のパンを求めなければならなかった産業の世界で、準備をする勇気をなかなかもたなかった。

ツェラーは非行少年と接する中で、他の才能に恵まれた教育者たちによって偉大な知恵を受け、それはさらに伝えられた。ツェラーは言った。「各人は改善すべきである。おだやかで、忍耐強く、愛情こめて接する勇気をしっかりもちなさい」。ツェラーは、施設の大きな祭りがとりわけ施設の退屈な生活を活気あるものにすると考えていた。彼はここでは親方であって、近くのすべての人々は祭りを嬉しい日にし、真の祭りとし、そこに人々が四方八方から集まってきた。南ドイツの慈善事業が広く住民たちの中に根を張り、ここで彼らの基礎となった。宣教の祝祭と施設の祝祭は、あらゆる階層の中で民の中心であり、また霊的生活の中心であった。救護施設から、墮落した古い状況に逆戻りし、かなり多くの子が突然なんらかの警察報告に浮上するということは果てしなく続いた。

3月革命以前（1848年以前）の南ドイツの救護施設運動はボイゲンからはじまった。世紀の中ごろに至るまで、ヴェルテンベルグだけでも20以上の救護施設がうまれた。それはシュヴァーベンのやり方にふさわしく、小規模になされた。苦境を完全になくすために大規模な行動は向いていなかった。ヴィヘルンが称賛した南ドイツの敬虔主義が受け継いだ価値あるもの、即ち、個々の子どもとの人格的牧会的会話、愛に満ちた人格的な扱いは、ここでのみ発揮できた。両親の意思に反対して子どもを収容する考えを、ツェラーは不愉快に思った。人格的な関係に基づく慈善事業は計り知れない成功をおさめた。ボイゲンはツェラーの家族と同じような3つの家族によって、それ以外からもしばしば導かれた。[15]

ボイゲンはまた貧民学校教師 - 養成学校とも手を組んだ。教師養成施設はほとんどなく、教師養成は長い間無秩序のままだった。このボイゲンにおいて、必要な時には、かつて教師として無給でこの職にと

どまって、宣教の責任感から仕事に従事する職業教育がなされた。ここでその最初の提案を受けた養成学校と他の兄弟の家から、ディアコニー施設が生まれた。各養成所の所在地には、救護施設の家長、宿泊所長、都市伝道者、巡回伝道者、療養所の看護人、少年担当書記たちがやって来た。この兄弟施設と同じラウエス・ハウスの発祥の地に、名づけ親ツェラーは影響を与えた。

ポイゲンの貧民学校施設の使命について、ツェラーは1820年、次のように語った。

「それは強制された施設ではない。そうではなく、イエス・キリストへの愛の自由な欲求から出たもので、自由意志をもち、自由な愛から行おう、自由な貢献を楽しみ、自由な人が導き、自由意志をもつ人から成り、^{しゆ}貧しい少年による奉仕を自ら決断して献げ、そして洗礼を受けた主に、その両親から自由に献げられた・・・子どもを受け入れた。

施設は、彼らの手の働きでパンを得、世の名声でなく、世の宝でもないものを求め、貧しい人、少数者、卑しい人に対して愛に満ちて腰を低くする、節度ある謙虚な人を養成しようとした。」 [16]

4

ワイマールのJ.D. ファルク - ラインラントのアーダルベルト・フォン・デア・レッケ - フォルマルシュタイン伯爵

ツェラーは、もう一人の偉大な内国伝道の先駆者、ワイマール公爵の参事官であるヨーハン・ダーニエル・ファルク(1768-1826)がしたことを、ポイゲンで行った。1806年のイエナ戦争の後、また独立戦争の年に、彼は底知れぬほど深い子どもの悲惨を見た。荒れ放題の時代に、未婚の出産数が上昇し、父親たちが軍服を着、母親たちは幼児をその運命に任せた。通過した軍隊の群れは伝染病をあとに残した。村落は助けるためにはあまりにも貧しく、子ども達は戦場のまわりをさまよい歩くか、または街の通りを不安にした。警察はこれらの若い放浪者、物乞い、また泥棒を捕えてとにかく獄に入れた。

ファルクはワイマールで「困窮者友の会」を設立した。彼はこの不

安に満ちた時代に、4人の彼の子どもを伝染病で失った自分自身の悲しみを通して、深い同情をもって故郷を失った子どもたちを彼の家に集めた。彼は、彼らを調査し勝手気ままな習慣をいったん規律あるものとしたあと、彼らを村の周辺で家庭教育をしている職人または農民の家庭に預けた。彼はやがて200人のこれらの不幸な子どもを就職させた。彼は彼ら全員から目を離さず、日曜ごとに自分の周りに集めた。

まず、1823年、彼は本来の施設教育に移行した。彼は、ペスタロツィの意味で、購入したルターの館を拡充し、寮の生徒たちの自発性を鼓舞した。ここでは、多くの歌が、子どもたちの真の明るさを満たしていた。「おお、^{なんじ}汝、喜びの、おお汝、祝福のクリスマスの時」というファルクの歌が歌われた。ヴィヘルンはクリスマスの祝祭の細部に到るまでファルクに学んだ。[17]

彼の生涯と慈善行為は、それを学んだダンツィヒ市参事会員の次の警告を果たすものであった。

「ヨハンネス、君はそこから出て行く。神と共に行け。君は私たちの借り手であり続ける。というのは、私たちは君を養子とし、貧しい子として、愛に満ちた世話をしてきたからである。君はこの借りを支払わねばならない。神は君をどこに導くというのか、また、君の将来はどうなっていくのか。君は貧しい少年であったことを忘れてはならない。いつか貧しい子どもが君の戸を叩くとき、そう思え。私たちは、いつの日か死ぬ者であり、ダンツィヒの白髪の年をとった市長と市参事会員である。ノックをするならば、君たちを戸から、追い出しはしない。」

アーダルベルト・フォン・デア・レッケ - フォルマルシュタイン伯爵(1791-1878)は、なお偉大なドイツの救護施設の創立者である。彼はラインラントでヨハネス・ファルクの影響を受け、1819年、「孤児と非行少年の救護と教育協会」を設立した。彼は、はじめはオーベルディクの父の家に、後で広大な建物の集まりと大きな家畜小屋と仕事場をもつデュッセルタールの古い修道院に、ラインラントにおいても全域的に災害となっていた放浪孤児と兵士になった子どもを、深い愛情をもって迎えた。彼はまったく自分一人の責任で必要な資金を集める根

気強く巧みな募金家であった。ヴィヘルンは一生の間、彼に懐疑的な態度で接した。

ヴィヘルンはメソジストの回心への渴望と、子どもたちを道徳的な評価によっていくつかの階級とグループに区分することを認めなかった。情熱的な伯爵自身が1847年ラインラントにおけるこの事業から離れ、独立したことはよかった。彼はシュレージエンに移住した。そこで休みなく働いた慈善家は、精神病患者のための施設「ドイツ・サマリア会修道院」をクラシュニッツにつくり、ディアコーンとディアコニッセたちを養成する施設と結びつけた。彼は、ラインラントで働いた時、男女の奉仕者の復活と、アルコール中毒患者の療養施設の創設など、内国伝道の多くの課題を予測した。[18] 彼がこれらの課題を実際に実現するためにとった手段はいうまでもなく実行できるものではなかった。だが彼の功績は広く認められている。

5

結び

青年への奉仕 - 幼稚園活動 - 家事と教育事業 - キリスト教教育思想

信仰覚醒運動の慈善事業において、ヴィヘルンより前の時代の人たちが達成したことを振り返ってみると、それは児童援護の観点からなされていた。児童への集中はアウグスト・ヘルマン・フランケ(1633-1727)に由来する。ハレはキリスト教学校制度の中心となり、新しいキリスト教教育を形成した。ヨーハン・フリードリヒ・オベリン(1740-1826)は非行少年たちを彼のアルザスの村に集め、幼児活動をはじめた。その後でフリードリヒ・フレーベル(1782-1852)は、彼の予備知識と研究によって、子どもの早期教育を成熟したものへと導いた。内国伝道の幼稚園活動は全世界の手本となった。[19] 「最も年少者の共同体の集まり」のために、後の幼稚園女教師養成学校が生まれた。

このことについて、幼児活動のはじめに明らかになったことは、救護施設運動がテューリンゲンやラインラントでますます拡大したよう

に、南ドイツの地域で全盛期となったことである。内国伝道の多くの大規模施設は、これらの奉仕をするために非行少年を投入した。国民の困窮のすべてはまず少年に具体的に起

った。古い救護施設運動から大規模施設と教育事業が成長した。貧民学校教師の養成の中に、救護施設の中で始めた教育学が生まれた。それは、ペスタロッツィに求めたように、19世紀におけるキリスト教教師の理想をアウグスト・ヘルマン・フランケに求めた。教育のために養成された信徒の協力者「兄弟たち」は、後期ディアコニーの準備段階にいた。

ヴィヘルン以前は、社会福祉課題は「キリスト教産業」の中で南ドイツに現れつつある^{きざ}兆しを見ているだけで大きな成果はなかった。